

あとがき

本書はお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科に提出し、2021年学位を授与された博士論文『求職者支援訓練のジェンダー分析：受講者のエンパワメントの視点から』（甲第400号）に加筆、修正したものである。本研究は、長期間にわたって調査にご協力いただいた女性受講者の方々の経験と語りに支えられた。この知見は、まさに彼女たちが歩んだエンパワメントの軌跡に根ざしたものである。ここに深甚なる謝意を表する。

なお、本書に掲載されたデータは、いずれも執筆当時のものである。また、求職者支援訓練等の職業訓練の科目名は、専門学校や教育機関によって表記が異なる場合があるが、当時のものをそのまま使用した。

本書では、求職者支援訓練をジェンダーの視点から分析し、女性受講者によるエンパワメントのプロセスを明らかにすることを主題にしている。日本の労働市場は依然として性別役割分業が根強く、性別による賃金格差や雇用形態の違いに起因する不平等といった構造的課題が存在している。とりわけ、出産・育児・介護などによる離職後の再就職機会は限定的であり、それらを主に担う多くの女性が、低賃金かつ不安定な雇用にとどまらざるを得ない状況に置かれている。このような状況は、個々人の努力や能力によって克服できるものではなく、社会構造的・制度的な要因が大きい。求職者支援制度は、職業訓練による技能習得と訓練中の生活保障を行う就労支援政策であるが、その受講者の7割以上が女性であるという属性の偏りは、本制度が性別によって偏在する労働市場の不平等な構造と密接に関連していることを示している。

本研究の目的は、単に制度の現状を描写することではなく、ジェンダーの視点から職業訓練の意義と効果を再検討し、今後の政策改善に資する知見を提示することである。特に、職業訓練を社会や人につながる「場」として捉え、受講者同士の相互交流や支え合いがいかにエンパワメントを促進するのか、そのプロセスを可視化することに主眼を置いている。本書では、長期にわたるライフヒストリー・インタビューによる調査から、職業訓練が女性受講者にもたらす変化や、訓練を通じて獲得される「力（power）」の獲得過程を多面的に分析する。女性たちは、職業訓練の受講によって自己の可能性を見出し、自らの

「力 (power)」を引き出していた。こうした現場の知見を可視化することは、労働市場におけるジェンダー不平等の是正に向けた重要な一步であると考えている。困窮する女性が経済的・社会的に自立し、尊厳を保持しながら生活していくためには、稼働力を高めるだけでなく、社会や人とのつながりを築き、主体的に選択する「力 (power)」を涵養することが不可欠である。これらをいかに育むかという問いは、今後の就労支援の根幹に関わる課題であり、本研究はその理論的基盤と実証的知見の双方に寄与することを目指している。

新卒で入社した航空会社を退職後、就労支援の講師として公共職業訓練や求職者支援訓練に携わったことをきっかけに、女性求職者の再就職や転職に伴う困難さを目の当たりにした。受講者たちは資格取得や技能習得に励んでいたが、企業に求人について問い合わせをする際に、彼女たちがシングルマザーであることがわかると断られるケースが多くあった。子育てや介護の有無、年齢、職歴の空白といった、本人の能力以外の要因によって再就職が制限される事例から、女性の就労機会を左右する社会的・制度的構造が課題として浮かび上がり、その構造に対して疑問を抱くようになった。

この頃からジェンダーや女性労働に関連する書籍を読みはじめ、女性が希望する仕事に就くための就労支援の在り方を考えるために、大学院への進学を決めた。進学準備を始めた矢先の2012年夏に疾患が見つかり、治療のために一旦中断したが、2014年に博士前期課程、2016年には博士後期課程へ進学した。複数大学での非常勤講師としての勤務と闘病を並行しながらの博士論文の執筆は容易ではなかったが、2018年には5年間の治療を終え、2021年に博士号の学位を取得するに至った。

博士論文を執筆するにあたり、ご指導を賜ったお茶の水女子大学大学院ジェンダー学際研究専攻の先生方に心より御礼申し上げる。主指導教員である申琪榮先生との出会いは、退院後の2012年冬に願書を取りに行った際に、学内で偶然お会いしたことに始まる。申先生には、研究の方向性から執筆の細部に至るまで丁寧にご指導いただき、博士号取得に至るまでの長い道のりを伴走してくださった。深く感謝申し上げたい。副指導教員の大橋史恵先生からは、質的調査の方法論や分析視点について示唆をいただき、金井郁先生には、労働市場や政策深化に資する論点をご教示いただいた。先生方には、専門的かつ献身的な

ご指導を賜り、院生生活も精神的に支えていただいた。学位審査に際しては、荒木美奈子先生とデ・アウカンタラ・マルセロ先生より多角的なコメントを頂戴し、研究の完成度を高めることができた。また、博士前期課程時代からご指導を賜ってきた足立眞理子先生は、退官された2018年まで研究室に所属させていただいた。足立先生のジェンダー研究者としての姿勢は、研究に向き合う上での私の姿勢に大きな影響を与えている。

博士後期課程の4年間、ゼミに参加させていただいた大沢真理先生、そして、鴈咲子先生、藤原千沙先生、定松文先生、堀芳江先生、シャイア・カレン先生など、ここにはすべてを書ききれないが、多くの先生方からの学術的支援は、本研究の理論的基盤を広げ、視座を広げる契機となった。これらすべてに敬意と感謝を捧げる。先生方が示してくださったジェンダー研究における先駆者としての姿勢と次世代を育成する情熱を受け継ぎ、より一層の精進を重ね、微力ながらも学術の発展に貢献していく所存である。

大学院生活では、博士前期課程からの同期であるバラニャク平田さんをはじめ、先輩や後輩の院生に恵まれた。そして、大学時代からの友人たちや会社員時代の友人たちを含め、多くの人々に支えていただいた。

1年半のポストドクを経て、2023年に講師として着任後、2024年度の科研費・研究成果公開促進費に採択され、本書の出版が決定した。しかし、2024年秋に新たな疾患が見つかり、治療のために刊行は延期された。科研費申請時から延長申請の手続きに至るまで、神田外語大学研究支援チームの皆様には多大なるご助力をいただいた。この場を借りて、感謝の意を表したい。

最後に、闘病しながら大学院へ進んだ私を長きにわたって支えてくれた母、そして、本書刊行を目前にした2025年7月に永眠した父は、いつも私の体調を気遣いながら応援してくれていた。家族への心から感謝をここに記す。

本書は、日本学術振興会令和6年度科学研究費助成事業（研究成果公開促進費・課題番号 24HP5128）の助成を受けている。本書の出版にあたって、法律文化社の畑光氏には折々に的確なご助言と温かな励ましをいただいた。改めて感謝を申し上げたい。

2025年8月

林 亜美